

2023.9.13 第10回霊的講話 「イエス様に出会った女性③」

生徒の皆さん、おはようございます。清心祭も無事に終わりました。本当にご苦労様でした。ただし、今週に入って、新型コロナウイルス感染症に感染した人も増えているようです。手洗いや教室の換気、そして必要に応じてのマスクの着用などの感染対策を今一度思い起こし、実行してください。また、月曜日の豪雨によって記念館にかなりの被害が生じています。体育の授業や部活動などに支障があるかもしれませんが、なるべく早い復旧を目指しますので、生徒の皆さんの理解と協力をお願いします。

それでは、今日の霊的講話を始めたいと思います。皆さん、深呼吸をして、心を静めて下さい。今日は「イエス様に出会った女性」というテーマのお話の3回目です。まず、ルカによる福音書7章36節から50節までをお読みしたいと思います。新約聖書の116ページを開いてください。116ページの下の段の左端から始まります。

「さて、あるファリサイ派の人が、一緒に食事をしてほしいと願ったので、イエスはその家に入って食事の席に着かれた。この町に一人の罪深い女がいた。イエスがファリサイ派の人の家に入って食事の席に着いておられるのを知り、香油の入った石膏の壺を持って来て、後ろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらその足を涙でぬらし始め、自分の髪の毛でぬぐい、イエスの足に接吻して香油を塗った。イエスを招待したファリサイ派の人はこれを見て、『この人がもし預言者なら、自分に触れている女がだれで、どんな人か分かるはずだ。罪深い女なのに』と思った。そこで、イエスがその人に向かって、『シモン、あなたに言いたいことがある』と言われると、シモンは、『先生、おっしゃってください』と言った。

イエスはお話しになった。『ある金貸しから、二人の人が金を借りていた。一人は五百デナリオン、もう一人は五十デナリオンである。二人には返す金がなかったので、金貸しは両方の借金を帳消しにしてやった。二人のうち、どちらが多くその金貸しを愛するだろうか。』シモンは、『帳消しにしてもらった額の多い方だと思います』と答えた。イエスは、『そのとおりだ』と言われた。そして、女の方を振り向いて、シモンに言われた。『この人を見ないか。わたしがあなたの家に入ったとき、あなたは足を洗う水もくれなかったが、この人は涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれた。あなたはわたしに接吻の挨拶もしなかったが、この人はわたしが入って来てから、わたしの足に接吻してやまなかった。あなたは頭にオリーブ油を塗ってくれなかったが、この人は足に香油を塗ってくれた。だから、言うておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさと分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない』そして、イエスは女に、『あなたの罪は赦された』と言われた。同席の人たちは、『罪まで赦すこの人は、いったい何者だろう

う』と考え始めた。イエスは女に、『あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい』と言われた。」

今日の聖書の箇所では、イエス様と弟子たちのほかに、ファリサイ派のシモンという人と「罪深い女」と呼ばれた女性が登場します。今日の霊的講話では、この二人の人について考え、今回は40節以降のイエス様の言葉について考えてみたいと思います。

さて、イエス様はファリサイ派のシモンという人に食事に招かれます。ファリサイ派というのは、その当時のユダヤ教の主流を占めるグループで、旧約聖書を厳密に解釈して一般の民衆に教える立場の人々でした。ただし、このシモンというファリサイ派の人は、必ずしもイエス様を尊敬して家にお招きしたのではないことが、彼の言葉や態度から伺い知ることができます。当時、一般の人はサンダルのような履き物を履いていましたから、外を歩く人々の足は土埃にまみれていました。ですから、招かれて家に入るときには、その家の奴隷や召使いがお客様の足を洗うのが普通でした。また、招いた主人は、挨拶としてお客の頬に接吻し、頭に香りのよいオリーブ油を塗るのが礼儀でした。しかし、主人のシモンはその何一つもイエス様にはしませんでした。

ファリサイ派の人々の多くは、イエス様が自分たちよりもはるかに権威ある言葉を語られ、民衆から慕われていたことを妬み、やがてはイエス様を何とか排除して殺そうと考えることになります。このシモンも、イエス様を家に招いて、イエス様の言葉や行動を観察して、もしチャンスがあればイエス様を批判し訴えようとしていたのではないかと思われます。ファリサイ派の人たちは、宗教に関してはとても熱心でした。そして、自分たちは正統派だ、自分たちこそが正しい信仰をもっているという自負心がありました。もちろん、自分は正しくありたいと願うことはとても大切です。しかし、私は思います。人間は「自分は正しい、自分は間違っていない」と強く思い込んでいるときに、本当は一番危ないのです。

そして、ここで、一人の女性、しかも「罪深い女」と呼ばれている女性が入ってきて、イエス様に香油を塗るという出来事が起きます。何か、前回の「ベタニアのマリア」のお話に似ていますね。しかし、この「罪深い女」と呼ばれた女性と「ベタニアのマリア」は別人であり、この出来事の時期も、そこで語られているイエス様の話の内容も全く異なります。

この女性の罪が具体的にはどのような罪であったのかは聖書には記されていません。ただし、多くの方は、彼女は遊女あるいは売春婦だったのではないかと考えていますし、私もそのように思います。当時の社会では、女性が社会的に、そして経済的に自立することは困難で、多くの女性は父親や夫に依存して生活せざるを得ませんでした。もし、何かの原因で家族が離散する、あるいは夫と死別するなどすれば、女性はたちまち生活に困ることになります。そして、様々な事情で困窮した女性が売春という方法で何とか生きていかねばならない状況に追い込まれていました。二千年前の当時だけではなく、現在でも、このような状況に

ある女性たちはどの国でも数多くいます。それどころか、多くの幼い女の子や若い女性が人身売買という形で売り飛ばされ、無理やり売春をさせられるという悲惨な状況も、アジアでもアフリカでも、ほかの地域でもたくさんあるということを覚えておいてください。

イエス様のもとに来たこの女性も、人々に利用されながらも蔑まれ、社会から排除され、さらに、「姦淫の罪を行っている私は、いつか神様から罰せられるかもしれない」という罪悪感や恐怖に苛まれていたのではないのでしょうか。そのような女性が、今、泣きながらイエス様の足もとにやって来ました。そして、涙でイエス様の足をぬらしています。

さて、生徒の皆さんにお聞きしたいと思います。彼女は一言も言葉を発していませんが、イエス様の足もとに来たこの女性は、その時、何を感じ、何を思っていたのでしょうか。彼女の涙は、悲しみの涙でしょうか、それとも、もしかすると、感激の涙あるいは喜びの涙だったのでしょうか。どう思いますか？ 皆さんの考えをノートにも書いてみてくださいね。

次回は、この続き、40節からのイエス様の言葉について考えたいと思います。

それでは、今日も、最後に一緒に「主の祈り」を祈りましょう。